

いる。しかし、八雲が妻のセツに宛てた手紙を見ると、八雲はひらがなをほとんど使わず、助詞の「ヲ」も使っていない。一方、染村絢子^三が一つの書き込みを例に『つ』が『ち』となるのは『英語覚書帳』でも見られる」と指摘しているように、セツの癖が表れている部分があり、それ以外のものもセツによるものである可能性が高いと思われる。ほかに決定的な証拠がなく、以前の所有者である可能性も捨てきれないが、後述する「常識」と書き込みの関連の深さから、私はセツの書き込みであると考えたい。

八雲の「常識」と原典との比較

では、「常識」とはどのような話なのだろうか。あらずじは次の通りである。

愛宕山の信心深い和尚は最近普賢菩薩が寺にやってくることを訪ねてきた獵師に話す。獵師は不審に思うが、その夜、和尚が言ったように普賢菩薩が現れた。和尚と小坊主はひれ伏して経文を読んでいるが、獵師はその後ろから普賢菩薩を矢で射てしまい、射られた普賢菩薩はたちまち消えてしまう。翌朝、その場所から矢に射抜かれたタヌキの死骸が見つかった。信仰にあつい僧侶も簡単にだまされるが、無信仰な獵師は常識を持っており、それを見破ることができた。

このような内容の「常識」と原典について、原典に書き込みがあった部分を比べてみたい。◇は八雲が書いた原文である「COMMON SENSE」、○は原典の「獵師、仏を射る事」^{一五}の文章である。○以下は書き込み内容を含めた考察である。なお、傍線は八雲によって加えられた部分、破線は削除された部分、波線は表現などが大きく変更された部分である。

(1) 削除

◇該当なし(該当なし)

○年比行て坊を出づる事なし」の「坊」の右隣に「寺」と書き込みがある。「常識」では、この部分が削除されているが、次に指摘する(2)の部分などで「寺」という言葉が使われているため、「坊」は「寺」だという説明をセツがしたと考えられる。

(2) 追加

◇The little temple in which he dwelt was far from any village; and he could not, in such a solitude, have obtained without help the common necessities of life. But several devout country people regularly contributed to his maintenance, bringing him each month supplies of vegetables and of rice. (その住んでいる小さな寺は、人里から遠く離れていて、そんな寂しいところでは、たれか世話でも見てくれるものがなければ、日々の暮しもなにかと不自由がちであった。が、さいわい、信心ぶかい山家の人たちが、月々、かならず米や野菜をもつてきては、この坊さんの暮しを見てやっていた。)

◎該当なし

○新たに背景説明が書かれており、(1)で指摘したように「Temple (寺)」という言葉が加えられている。

(3) 変更と削除

◇One day, when this hunter had brought a bag of rice to the temple, the priest said to him (ある日のこと、この獵師がお寺へ一袋の施米をどげに行くと、和尚がこんなことをいった。)

◎久しく参らざりければ、餌袋に干飯など入てまうでたり。聖悦で、日比のおぼつかなさなどの給ふ。その中に居寄りの給ふやうは、

○「餌袋」という言葉の上の余白に「餌袋_ニ之_ニ鷹_ヲ入_{レテ}持_歩ル_ヲ轉_テ食物_ヲ入_{レテ}持_歩ク_袋」と書き込みがある。一方、「常識」では「a bag of rice」(一袋の施米)となつている。八雲は、「餌袋に干飯など入て」を解釈しなおして「一袋の施米」としたようである。セツが書き込みにあるような説明を八雲にし、「食物を入れて持ち歩く袋」という説明を聞いた八雲が、西洋の読者にもわかりやすいように、「干飯」を「米」にしたのではないだろうか_{一六}。

(4) 追加

◇ it is possible that what has been vouchsafed me is due to the merit obtained through these religious exercises. I am not sure of this. (勤めの功德かとも思われるが、まさかそんなはずもあるまい。)

○「經をたもち奉りてあるしるしやらん、
○「經をたもち奉りて」の「たもち」の右隣に「読」と書き込みがある。「常識」では、その前の部分で「読経と三昧」となつている。セツが「たもち」の意味を「読む」と説明したものと思われる。

(5) 追加

◇ that Fugen Bosatsu comes nightly to this temple, riding upon his elephant. (毎夜当山へな、普賢菩薩が白象に召かれてお越しになられるのじやて。)

○この夜比、普賢菩薩、象に乗りて見え給。
○「菩薩」の右隣に「ぼさち」と書き込みがある。このことについては、染村絢子_七が『う』が『ち』となるのは「英語覚書帳」でも見られる」とセツの書き込みである可能性が高いと指摘している。

(6) 変更

◇ And, in another moment, the elephant with its shining

rider arrived before the temple, and there stood lowering, like a mountain of moonlight a wonderful and wondrous. (と思ううちに、光り輝くお姿をのせた象は、早くも寺の門前へお下がりになつて、ちよと月光の山のように、あやしくものすい、そびえるように高だかとお立ちになった。)

○見れば、普賢菩薩、白象に乗て、やうくおはして、坊の前に立給へり。

○「やうく」の右隣に「漸々」の書き込みがある。『新大系42』の脚注によると、「しずしずと。おもむろに」という訳になつている。しかし、八雲はより多くの情報を入れて詳しくしている。

(7) 追加、削除、変更

◇ Then the priest and the boy, prostrating themselves, began with exceeding fervour to repeat the holy invocation to Fugen Bosatsu. (和尚と坊主とは、その場にひれ伏して、一心不乱に經文を読みあげている。)

○聖泣くく拜みて、いかに、ぬし殿は拜み奉るや」といひければ、「いからは、この童も拜み奉る。をい。いみじうたうとし」とて。

○「をい」の右隣に「あ」の書き込みがある。

(6)と同様に『新大系42』の脚注によると、「はいはい」という訳になつているが、八雲は会話の部分を書いておらず省略しているようである。

(8) 追加と削除

◇ Immediately, with a sound like a thunder-clap, the white light vanished, and the vision disappeared. Before the temple there was nothing but windy darkness. (たちまち、落雷のような大音響とともに、かのこうこうたる光りはぱつと消えた。とたんに、菩薩のすがたも、かき消すごとくに消え失せた。あとにはただ、門前にさくさくと吹きすさ

ぶ夜風の闇があるばかりである。)◎火をうち消つごとくにて光も失せぬ。谷へとゞろめきて逃行音す。

○「火をうちけつごとくにて」の「けつごとく」の右隣に「すと同じ」と書き込みがある。つまり、「けつ」は「消す」と同じだという意味であると考えられる。「常識」では「disappeared」(かき消すごとくに消え失せた)となっており、書き込み内容が反映されていると言えるだろう。

以上、八雲の「常識」と原典となつた『宇治拾遺物語』の「獵師、仏を射る事」について、書き込みがあつた部分と比べてみた。

語注など一部の書き込みについては、セツがこれらの書き込みに沿つて読み聞かせたとと言える。ちなみに、『宇治拾遺物語抄』への他の書き込み内容は、上巻八〇ページの「おどろき」に対する「目のさめる」や上巻八三ページの「つゆー」に対する「少しも」、下巻二四ページの「あてやか」に対する「上品」など語注が多い。そのほか、下巻二四ページの「えい」を説明するために絵も描かれている。

このように、書き込みは語注などが多く、原典の内容をより理解するためのものであると考えられる。原典をセツから聞いただろう八雲が書いた「常識」は、原典よりも詳しく具体的になつており、書き込み内容の影響を強く受けていると言えるだろう。

今回は原典に書き込みがあつた部分について、追加や削除、変更内容を見てきたが、今後は書き込みがない部分も含め、全体を通してそれらを見ていきたい。この過程で、八雲が原典をどのように理解し、何を読者に伝えたかだったのが明らかになるのではないかと考えている。

主な参考文献

- ・ 田部隆次『小泉八雲(第四版)』(北星堂書店、一九八〇・一)
- ・ 森亮『小泉八雲の文学』(恒文社、一九八〇・八)
- ・ 小峯和明校注『今昔物語集四 新日本古典文学大系36』(岩波書店、一九九四・一一)
- ・ 富山大学附属図書館編『富山大学附属図書館所蔵ラフカディオ・ハーン ヘルン(小泉八雲)文庫目録 改訂版』(富山大学附属図書館、一九九三・三)
- ・ 小泉時、小泉凡編『増補新版』文学アルバム小泉八雲』(恒文社、二〇〇八・一一)
- ・ 染村絢子『原典』―活字本から版本へ―(「へるん」二五号、一九八八・六)
- ・ 小泉和弘「ハーンの『常識』に関する考察」(芝浦工業大学研究報告人文系編)三六巻一号、二〇〇二)

※本稿は、拙稿「小泉八雲『常識』研究―ヘルン文庫書き込み調査から―」(富山大学大学院人文科学研究科論集)第九集、二〇一一・二)を基に行つた富山文学の会第四九回例会の発表要旨である。

一 八雲に関連する作品等の本文内での表記については次のようにした。八雲の著作は『』、その中の個々の作品は「」、ヘルン文庫所蔵の書籍は『』、その中の個々の作品は◇でくくった。

二 森亮『小泉八雲の文学』(恒文社、一九八〇・八)には「『再話文学』という用語は平井呈一氏が使い始めたものらしい」と書かれている。平井は「八雲と再話文学」(『日本雑記他』所収)で「『再話文学』とは(略)“retold tales”あるいは“twice-told stories”の意味でありまして、八雲独特の作品形式、あるいは手法を、かりにわたくしがそう名づけたものである」と述べている。

- 三 田部隆次『小泉八雲(第四版)』(北星堂書店、一九八〇・一)
- 四 富山大学附属図書館、一九九三・三

五 平井呈一訳『怪談・骨董他』（恒文社、一九八六・四第二版）の「参考資料」

六 三木紀人、浅見和彦、中村義雄、小内一明校注、岩波書店、一九九〇・一一

七 ちなみに『新大系42』の脚注には次のようにも書かれている。

「愛宕の事件となっているが実は外国種の話らしく、これの類話がミヒヤエル・エンデの『満月の夜の伝説』として見える。インドの民話にもとづく物語という。本話はこれと同源でもともとは仏典にもとづくものか」。もしかすると、八雲は同じようなインドの民話も読んでいた可能性もあるが、ここでは言及しない。

八 井澤節校訂纂注、出版者は辻本九兵衛、一八九六。

九 「国立国会図書館デジタルコレクション—今昔物語前編」(URL: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1939054>) 「国立国会図書館デジタルコレクション—今昔物語後編」(URL: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1939324>) (二〇一七年一月確認) 参照。

一〇 「へるん文庫」のWebサイトにリンクが貼ってある。

直接は (URL :

https://toyama.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=13213&item_no=1&page_id=32&block_id=36) (二〇一七年一月確認) 参照。

一一 小泉時、小泉凡編『増補新版』文学アルバム小泉八雲』（恒文社、二〇〇八・一一）を参照した。

一二 『原典』—活字本から版本へ—（「へるん」二五号、一九八八・六）

一三 西田義和編註『L. Hearn's SHORT STORIES』（文化書房博文社、一九九八・一一）

一四 平井呈一訳『怪談・骨董他』（恒文社、一九八六・四第二版）

一五 三木紀人、浅見和彦、中村義雄、小内一明編注『宇治拾遺物語 古本説話集 新日本古典文学大系42』（岩波書店、一九九〇・一一）

一六 小泉が原典と考えている『今昔物語集』では、「菓子」とな

っているようで、「(菓子)」というのは、現代では果物のことで、猟師が持参するには気が利き過ぎていると考えられるので、ハーンはより現実的な(米)に変えたものと考えられる」と述べている。

一七 『原典』—活字本から版本へ—（「へるん」二五号、一九八八・六）

一八 書き込みについて考察するためにはセツがどの程度教養を備えていたかを検証することが必要である。今後の課題としたい。